

緑陰随想



執筆者一覧 (順不同・敬称略)

■望まれる医療と望まれていない野望

札幌市医師会 藤原 秀 俊

■アルテミア・サリーナ

石狩医師会 工 藤 謙 三

■三侯山荘から見た“小檜”

北広島医師会 相 原 稔 彦

■大腿四頭筋

函館市医師会 葛 西 善一郎

■「旭医だより」100号発刊に思う

旭川市医師会 稲 積 文 子

■下世話な話

岩見沢市医師会 松 本 光 博

■センチナリアン

上川郡中央医師会 水 野 清 司

■卒後臨床研修の必修化に思うこと

日高医師会 堀 田 和 敏

■開業への夢…小児科勤務医の想い

夕張市医師会 西 見 寿 博

■美唄と啄木

美唄市医師会 吉 村 誠 治

■“起立性調節障害児が増えている？”

北海道大学医師会 小 林 邦 彦

■天国と地上の間

深川医師会 成 田 昭 彦

■“100年を迎えるにあたって”

小樽市医師会 大 口 正 樹

■-私の庭の花暦-

渡島医師会 西 谷 雅 行

■藤沢周平の世界

釧路国医師会 行 木 紘 一

■「旅-長浜」

滝川市医師会 武 内 恵 輔

■ペランダ園芸

北見医師会 千 葉 勉 夫

■車と

旭川医科大学医師会 葛 西 真 一

■マスターズトーナメントの思い出

宗谷医師会 高 橋 昭 彦

望まれる医療と 望まれていない野望

札幌市医師会 藤原 秀俊
札幌秀友会病院

患者さんはどんな医療を望んでいるのでしょうか？

日々の日常診療を通して、通院中の患者さんが私に要望していることを記してみる。

- ① 自己負担の少ない医療であって欲しい。
- ② 定期的に適切な検査をし、病気を早期発見して欲しい。
- ③ 病気になったときには高度な最新の医療を受けたい。
- ④ 治る見込みのある時は、どんなことをしても治して欲しい。ただし見込みのないときは何もしないで欲しい。
- ⑤ コロッと苦しまないで死にたい。
- ⑥ 悪いときはいつでも診て欲しい。そして同じ先生に診て欲しい。
- ⑦ 待ち時間を少なくして欲しい。
- ⑧ 十分時間を取ってお話をして欲しい。

患者さんの望みは大変分かりやすい。しかし、一方で相反することもある。①から⑤までの希望は、普段は低額で良いが、いざというときには相当の費用負担は覚悟をしており、また、決して寝たきりになることや過剰な終末期医療を望まず、家族に精神的・経済的迷惑を掛けたくないという気持ちの表れである。⑥から⑧は十分に理解可能な要求である。しかし、実際問題として不可能な内容でもある。3時間待ちの3分診療は今では少なくなっていると思われるが、現在の診療報酬体系ではいわゆる無理な注文であろう。患者さんは診察する医師が誰でも良いわけではない。診療に十分時間を取り、説明が懇切丁寧であり、腕が良ければ（さらに顔が良ければ？）、患者さんは増

え、さらに待ち時間は長くなるのは自明の理であろう。

患者さんが求めているものは、ちょっとした便利さやちょっとした快適さである。古い言葉で恐縮ではあるが「一億総中流意識」である。日本企業のトップや医療現場を知らない学者が考える国民の希望と、現実の患者さんの希望とは大いに乖離しているのである。

医療に対する規制を益々厳しくし財政の削減を行う一方で、医療に参入する規制を緩和しようとする総合規制改革会議は、医療行為そのものよりも事業として参入することのみが目的であり、そこには利益第一主義の姿が見える。さらに同会議は一般小売店での風邪薬などの医薬品販売を目論んだ。現在でさえ風邪と診断されて治療していたが、くも膜下出血や髄膜炎である例が年間それぞれ数例ある。安易な財政優先策は、国民の健康を犯し、益々医療費の増大を招くことになる。

社会保障の充実により財政が破綻した国はない。国家財政破綻の多くは戦争や内乱によるものであり、あるいは最近ではバブル経済の破綻によるものである。国防費を無用に増やし、また、お金を粗末にしてきたつけが回ってきただけである。人なくして国家は成り立ち得ないし、また健康なくして人は成り立たない。最近の市場原理主義者の言動は、バブル時代の再現を夢見る拝金主義者がまた闊歩して来たかのようなようである。「国民のため」という衣で覆い隠してはいるが、野望が透けて見える。



アルテミア・サリーナ

石狩医師会 工藤 謙三
はまなす外科医院

ブラインシュリンプという甲殻類の存在を知ったのは、熱帯魚のディスカスの繁殖に成功してからのことであった。先達に教わるままに稚魚の餌としてこれを用いたのだが、初めてお目にかかったとき、果たしてこれがどういう生き物なのかまるで見当がつかなかった。そこでとりあえず百科事典をひもといてみることにした。

『brine＝塩水、shrimp＝小エビ。無甲目ホウネンエビモドキ科の体長0.5cmくらいの甲殻類。世界中に広く分布しているが、中でもヨーロッパやアメリカ大陸などの塩分の濃い湖に生息している。淡水から海水の3倍以上までという非常に広い範囲の塩分濃度に生存できる。耐久卵と呼ばれる卵は乾燥に耐えるのみならず、脱水状態を経過しないと孵化しない。この卵は湿気を与えないように保存しておく数年間を経て孵化する能力を失わない。学名をアルテミア・サリーナ *Artemia salina*という。』

そういえばブラインシュリンプの卵は缶に詰められて「アルテミア」という商品名がついている。

飼育する熱帯魚が産卵し、稚魚が孵るようすは幾度経験しても感動的なものだが、ケシ粒にも満たないような仔魚に与える餌としては、ブラインシュリンプをおいて他にはない。乾燥した状態の卵を海水濃度の塩水に入れてエアレーションを施し、25℃に保温しておく48時間後に幼生が孵化する。この幼生はノープリウスと呼ばれ、水中に泳ぐ姿を肉眼でとらえるのは容易でないほどに小さく、このときまだ甲殻類としての殻を持たないため仔魚にとって消化の良い恰好の蛋白源となる

のである。

かくも有用なブラインシュリンプだが、ショップで売られているものはアメリカのソルトレイクで採れたものに限定されている。中国やロシア産のものは精製が悪いために孵化率が低いばかりではなく、病原菌を持ち込む恐れがあって敬遠されているのである。このことは、じつはアルテミアが熱帯魚のみならず、あらゆる養殖魚にとって唯一無二の稚魚の餌であると聞けば納得がいく。タイもヒラメも、人工的に孵化した仔魚にとってはかけがえのない貴重な生き餌なのである。その孵化率と安全性は全世界の養殖漁業を動かしていると言っても過言ではない。

良質なブラインシュリンプの産地であるグレートソルト湖は、ユタ州の砂漠の中に存在している。この地域は不毛な土地が多く、白人の入植が遅かったが、1847年になって東部の迫害から逃れてモルモン教徒が到来した。このとき湖を泳ぎ回っているアルテミアを見て、後世これが一大産業に発展しようとは、誰が予見しただろう。当地で開かれた2002年冬季オリンピックは記憶に新しいところだが、この大会の成功の陰にブラインシュリンプが寄与していたことは、あまり知られていない。

湖には膨大な青緑の藻類があってアルテミアの食べ物となっており、高濃度の塩分のままでは孵化しない卵も、まれに降る雨を待って幼生となる。ほかに魚類もわずかながら生息し、ときおり鳥類が訪れて食物連鎖を形成している。

わが家のディスカスたちはそんな事情など知らぬ顔でブラインシュリンプをパクパクと口にして大きく育ち、4組ものペアができた。彼らは銀白色の婚姻色に身を染めて、いまやベビーラッシュの真っ盛りである。孵化した幼魚は4ペア合わせて100匹あまり。さすがに飼育水槽が追いつかず、難しいといわれる繁殖ではあるが、バースコントロールの必要性を感じている。

緑 陰 随 想

三俣山荘から見えた “小槍”

北広島医師会 相原 稔彦
順天病院

今年も岡山大学医学部北アルプス三俣診療班から診療班への参加依頼と寄付を募る手紙が届いた。小生は昭和55年に岡山大学を卒業したが、昭和53年と54年の夏休み、この診療班にボランティア学生として参加した。

診療班の名前となっている三俣とは長野・岐阜・富山の三県にまたがる三俣蓮華岳のことである。その頂上から30分ほど下った鞍部に三俣山荘があり、そこに併設されているのが岡山大学医学部北アルプス三俣診療所である。

岡山大学医学部の医師・看護師・学生などがボランティアで診療班を結成し、7月中旬から8月下旬の夏山シーズンに、交替でこの診療所に駐在して診療にあたっている。昭和40年頃に開設された由緒ある診療所なのである。

三俣蓮華岳は北アルプスの最も奥にある山の一つと言われており、山荘の裏には黒部川の源流が流れているようなところである。しかしながら、最も奥とは言っても、さすがに北アルプス。夏山シーズンには登山者も多く、北海道の静かな山に慣れた方々はびっくりすると思われる。

小生が北アルプスに行ったのは診療班に参加したときが初めてであり、山々の雄大さ、美しい高山植物、かわいらしい雷鳥の親子など、見るもの全てに感動したのだが、多くの思い出の中から一つをご紹介します。

三俣山荘の正面遠くに北アルプスの主峰槍ヶ岳が見える。槍ヶ岳は槍の穂先のような形の頂（大槍）を有するのでこの名前があるが、この大槍のすぐそばには“小槍”と呼ばれる岩峰が存在している。山荘から見ると、小槍の後方に大槍がそび

える位置関係となる。そして両者とも同じような色の岩山なので、山荘から両者を区別するのは非常に困難である。ところが最初の年のある日の日没近く、先輩（北アルプスには何回も来ているベテラン）が“こっちへ来て見ろ！”と言うので小屋の前の広場に行くと、雲が大槍と小槍の間に流れ込んで来て、大槍を包み隠し、その雲を背景に小槍がくっきりと浮かび上がって見えるのであった。その先輩によれば“めったに見られるもんじゃないぞ。”とのこと。しばらく（数分であったか？）その景色に見とれていたが、雲が流れ去るとともに小槍は大槍と重なって区別できなくなり、日没とともに槍ヶ岳も徐々に姿を隠していつてしまった。後にも先にも“小槍”を見たのはこのときだけであった。ちなみに、翌年の診療班の中には体力に物を言わせて山荘と槍ヶ岳を12時間ほどで往復して実際に大槍に立った者もいた。さすがに小槍は見ただけで、アルペン踊りは踊らなかったようではあるが。

わずか2回の山行ではあったが、思い出多き経験であった。もう一度、今度は家族を連れて行きたいと思ってきたが、今の体力ではどこまで行けることやら。いや、あの頃背負えたザックも背負えないかもしれない。

この文章をお読みの山好きの先生、もし三俣山荘を訪れることがあったら診療所の仲間に声をかけて上げて下さい。

アルプス一万尺 小槍の上で
アルペン踊りを さあ踊りましょ



大腿四頭筋

函館市医師会 葛西善一郎
函館筑峰会介護老人保健施設

週1回のアスレチックと日曜ゴルフである程度足には自信があったが、昨年5月に事故でこれ等を5カ月ほど休んだら、今年のゴルフは歩いているうちに置いて行かれる、2階への階段で膝が痛む等、下肢の筋力の低下を痛感していたところ、新聞で「真向法」の広告を見て取り寄せ、早速取り組んでみた。やり方そのものは簡単で第1から第4まで4体操が主で、あとは補助体操。1日3分、毎日続けるというもの。尾骶骨から脊柱を前方に倒してゆくのの基本。第4体操の正座から下腿を開き両足の間に臀部を床に落とし後方に倒れる。これが一番大変、いきなりやると大腿四頭筋の断裂を起こす。足の甲と大腿前面が猛烈に痛い。後ろに座布団を4枚重ね、その上に倒れるのがやっとである。これをやり始めて10日位で2階への階段をトントンと軽く上がれるようになった。

43年間の耳鼻科の開業を止めて、老人保健施設へ勤務して4年半。要介護度1以上の入所者の100名近くを見ていると、ほとんど正常な歩き方のできる高齢者はいない。医療の進歩で確かに日本人の平均余命の延長は顕著であるが、下肢筋力の退化は目に余るものがある。日本人の生活様式の変化一畳の部屋から椅子の洋間・布団からベッド・和式から様式トイレ・徒歩から車等に大きな要因がある。下肢筋力の退化に医療はその予防に目をつぶってきた弊がある。相俟って骨粗鬆症で膝関節症・大腿骨頸部骨折・脊椎骨折等のアクシデントは介護者の歩行・車椅子への移乗介助があっても、痴呆による倍加もあってひきも切らない。

去る6月7日より3日間、所属の俳句の全国大会が俳句のメッカといわれる四国の松山であって参加した。1日観光の吟行の歩きの中で、松山城天守閣三層135段に登った。急で狭い階段で足に故障があれば絶対に登れない。観光は歩きの他にあちこち階段があるので、全部車でというわけにはいかない。翌日は俳句大会で歩きは休んだが、9日の帰り途中、金毘羅宮の785段を日盛りの中登って降りた。竹の杖を借りて、切り口にハンカチを当て右手掌で押し付け、ジグザグを心掛けて登った。登る前の不安感と降りた後の達成感が縋い交ぜになって、俳句とともに大きな旅の収穫となった。その時「あ、あの真向法をやっていなかったら絶対に完登はできなかったろうな」という思いがした。そのくらい、足を上げるのが軽く膝の痛みがなかった。汗がびっしょりでシャツが濡れ、たくさんある土産物店で、どこか一軒シャワーをサービスしたらシャツ等の付属品も、お土産も売れて繁盛するのになどと思った。

「脚の老化は大腿四頭筋から始まる」この筋の伸展運動が、老後の歩行に大きなウエイトを占めていることは間違いない。週1や週2でなく、年齢が高くなればなるほど、全身の運動時間を増やしてゆかなければ、筋力低下速度を防ぎきれない。老年病ばかりでなく、老年予防医学・体力維持・老年スポーツの分野の研究などもこれからの超高齢化に向け緊急になされるべきであるとの思いが強い。

俳句『松山行』 葛西 洗耳
四百年 城の青葉の 幽きかな
伊予路来て 炎帝の街 懐しき
木蠟の 一朝の夢 花石榴
子規に無き をんなの匂ひ 夏昏し
裸男に 刺青混じる 朝道後

緑 陰 随 想

「旭医だより」 100号発刊に想う

旭川市医師会 稲積 文子
稲積眼科歯科医院

旭川市医師会の機関紙であります「旭医だより」100号が、昨年12月に記念特集として発刊されました。発刊にあたりまして、旭川市医師会会長、増田一雄先生の挨拶を始め、北海道医師会会長の飯塚弘志先生による、100号記念誌に寄せて、と題しまして、医療を取り巻く環境が厳しくなる中において、地域住民との繋がり、マスコミ等の対応なども含め、広報活動の重要性を指摘されました。その他、現旭川市医師会の副会長、理事、歴代編集委員の記念随想が盛り沢山の内容で掲載され、記念すべき特集号となりました。

「旭医だより」創刊についての記録を旭川市医師会史誌の中から簡単に掘り起こしてみました。

昭和44年4月、第5代旭川市医師会会長に田下福造先生が就任され、広報担当として責任者梯朝一先生、委員に吉田明義先生、佐々木亨先生、計3名の理事が任命され、旭川市医師会の機関誌として「旭医だより」が起案されました。

- ・外部に対しては、地域住民またはマスコミに対するPR活動。
- ・内部に対しては、理事会の決定事項の周知徹底を図る。

以上の目的で、昭和45年4月に第1号が発刊され、1年に3回の周期で発行することが決まりました。昭和46年に「旭医だより」編集委員会が発足し、7名の委員で構成されました。編集会議の内容は、

- 1) 広く会員より寄稿を求め、筆跡を留める。
- 2) 医師会の出来事などを、細大もらさず収録する。
- 3) 会員の冠婚葬祭、入会、退会等の動向を掲載

する。

- 4) 旭川医大と連携を保ち、医局関係者に広く寄稿を依頼する。
- 5) 学術、スポーツ、その他趣味等の記事を掲載する。

以上が「旭医だより」編集の方針として決められました。この方針は100号に至る現在まで、脈々と受け継がれておりますが、私は昭和56年に編集委員に任命されて以来、「旭医だより」の編集が、これら5項目を骨子としていることは、迂闊にも知りませんでした。

昭和58年5月「旭医ニュース」が創刊されました。医師会の事業の拡大、行政との連携による業務の過多などにより、年3回の「旭医だより」だけでは対応できなくなり、「旭医だより」から分かれて、月刊誌として、理事会結果、各部よりの連絡事項、会員に対して啓発、宣伝などが記載されました。

私はある時期、「旭医だより」と「旭医ニュース」と、一体内容にどのような差があるのか疑問に思ったことがあります。旭川市医師会史誌を調べてみて、ようやくその違いを知り、「旭医だより」と「旭医ニュース」は旭川市医師会の機関誌として、車の両輪の如く機能していることを知りました。

「旭医ニュース」はビジネス的な内容が主体ですが、「旭医だより」は非常に盛り沢山の内容を抱え、しかも近年ますます医師会としての広報活動が重要視され、編集の手腕が問われる厳しい時代になってきました。何か良い知恵はないのか？ と常に自問自答しながら編集にたずさわっております。



緑 陰 随 想

下世話な話

岩見沢市医師会 松本 光博
松本皮膚科クリニック

歴史ある北海道医報の特集の随想としては不適切かもしれませんが、せつかくの機会なので医師会と政治の関係について日ごろ感じている下世話な話を一会員として述べさせていただきます。

一つは消費税です。国家財政が崩壊し、景気の低迷が長期化し、少子高齢化が進むのが確実な状況では消費税率が今後10%、15%と引き上げられるのは必定です。本来国民が生きていくのに最低限必要な食料品、介護用品、医薬品などに消費税を課すべきではありません。病気になって金銭的にも困っている患者さんや患者家族の負担の軽減と医業の安定のためにも、医師会としましてこれらの項目に関しては消費税の撤廃、もしそれができないならば税率の軽減を強く求めるべきです。一度引き上げられてしまえば取り返しはつきません。今から重点的に取り組むべき課題です。

もうひとつは政党支援の問題です。医師連盟は毎年多額の献金を自民党に対して行っております。坪井日医会長はある代議員の質問に答えて、自民党が与党であることを支持の理由に挙げているが、それではあまりにも説得力がありません。おそらく一般会員には分からない、あるいは話せない理由があつてのこととは思いますが、無条件の支持は疑問です。たとえば道路族と言われる政治家たちがいます。この連中は特殊法人を儲けさせるため民間よりもはるかに高コストの道路や橋、空港を造り続け、国家財政が完全に破綻した現在でもまったく反省の言葉もなく国会決議だからといってさらに道路を造れと騒いでいる。この連中にとっては医療や福祉より、人もいないところに道路を造ることの方が大事なのである。国家

財政を一家の家計にたとえるならお父さんが失業しているのに借金をして外車を買ったり、高価なレストランで食事をしたりして家族の入院費が払えない、お年寄りのオムツ代がないと騒いでいるような状況です。政府の計画経済的な公共投資、護送船団方式と呼ばれる官の民への介入、累進課税、高い法人税、官尊民卑ぶりなど、一番似ているのは直接見てきたわけではないが旧ソ連の体制ではないだろうか。日本は資本主義の国ではなく世界でただひとつ生きながらえている社会主義国だと考えると、日本の今までの政策は理解できるし予測可能でもある（ただしそのテンポは予想以上）。日本もソ連のように崩壊の危機に瀕しているのは明らかである。今すべきことは医療、福祉の財源を確保するため利益を生まず税金として戻ってこない効率の悪い公共事業は原則行わず、特殊法人も原則廃止とし歳出の削減に努めるべきである。道路特定財源も医療、福祉にまわすべきである。ただしこれは内部でのパイの奪い合いを意味するので困難が予想されるが、おそらく他に方法はないものと思われま。

現在とりえる手段となりますとかなり寂しくなります。ひとつはこの考えを議員や候補者に幅広く呼びかけ理解を求め。賛同し、かつ公共事業の削減に熱心な候補者のみ政党に関係なく応援する。道路族議員や公共投資を声高に叫ぶ人などに対して落選運動はできないだろうが、応援をしないことは可能です。また、応援した候補者が当選してからもどの法案に賛成したか反対したか、国会でどんな質問をしたか、あるいは意見を述べたか、委員会の出席はどうか事細かにウオッチし、一般会員に報告し次回の参考にすべきである。選挙前に印刷物が一枚送られてきて応援しろと言われても、一般会員にはそっぽを向かれるのが関の山である。某国際政治学者あがりの議員は、医師会にもう力はないといろいろな所で話しているが、それは単に会員の意思を集約するシステムができていないだけで、その潜在力は大きいと思います。

日本はかつて世界が経験したことのない高齢化

緑 陰 随 想

社会、言い換えればマニュアルのない退却戦を強いられています。もう時間切れかもしれないが、できるならソフトラディングでクラッシュだけは避けてもらいたいものである。

センチナリアン

上川郡中央医師会
北海道医報通信員 水野 清司

長寿者、特に100歳を超えた百寿者（センチナリアン）の研究は、長寿と素晴らしい歳のとり方の秘訣を探るためよく行われている。

不老長寿は人類始まって以来の夢。しかし、現実には健やかに百歳に到達することが現代人の夢であろう。人の老化や、百歳に到達した人の肉体と精神について調査、研究が行われている。

国民的な存在だった双子の姉妹「きんさん、ぎんさん」は3世紀にわたる天寿を全うされた。

そのご遺体は「長寿の研究をしたい」と言う主治医の希望で病理解剖された。長寿研究を目的とした病理解剖は国内で初のケースといわれ、お二人の長寿の足跡が、未来に受け継がれた。

双子で百歳を超える長寿というまれな例であることから、ご家族も承諾され長寿研究として生き続けられ、どんなところに健康の秘訣があったかなど今後の老人医療に貢献することが多かったと思う。百寿者が平均寿命の伸びとともに多くなっているのは、身体にのみ原因を求められるものではなく、食生活を始めとするよりよい生活習慣と医学の発展によって百寿者が増えてきたものと考えられる。

長寿者との対談で日常生活、特に食事についての質問をされるが、3食きちんと食べる、好物の上位は野菜、果物、魚、甘味の順、何でも美味しく食べる、夜もよく眠り、多くが散歩や軽い運動習慣を持ち、若い頃から煙草を吸わないと答えて

いる。適当な身体に合った運動を日常生活に取り入れ、バランスのよい食事に気をつける、このことは簡単ではあるが、正常老化を遅らせる重要なことである。

沖縄県は長寿王国として有名で、百歳長寿者が全国でトップでセンチナリアンたちは歳を取っても隠居とは無縁の勤労意欲の高さや、高齢者を孤独にさせない社会風土もあって明朗、快活といった性格で毎日の生活をアクティブにこまめに動く人が多いようである。

身体の変化には百歳に特有なものではなく、多くのパラメーターは70歳代、80歳代、90歳代の延長線上にあるが、生活機能の自立している人の割合は減少する傾向にあり、人間の寿命は120歳未満で、伸長していない宿命的な現実である。「私は3年前に母を103歳で送ったが、枯れてきた身体ではあったが永く病むこともなしに眠るように息を引き取った、その穏やかな顔から老化の科学を教えられたことに感謝している。」



卒後臨床研修の 必修化に思うこと

日高医師会
静内町立病院

堀田 和敏

今回、総合臨床雑誌が「卒後臨床研修の必修化を控えて」という特集を組んでいるのを目にし、いよいよ来春からこの制度が始まるのかと改めて認識させられました。

現在私が勤務している病院は、地域医療の第一線とも言える町立病院であり、平成12年にこの制度が法制化された時点では、まだまだ先のことで、ましては私のようなものが勤務している地域にはあまり関係のないものと思っておりました。

しかし、今年に入り来春から大学病院内での医師の不足が予想されることから、現場への医師の派遣中止や削減といった話題を耳にする（目にする）機会が増えてまいりました。この制度がこのような形でわれわれのような医療機関に影響をおよぼしてくるとは、浅はかもの私は予想もしておらず、さてさて今後の医師確保はいかがすべきかと今頃になって思案している次第であります。考えてみますと、今までも医学部を卒業し、国家試験に合格することで「医師」と呼ばれても、現実的には即戦力として現場で役立つわけはなく、大学病院等の研修病院で研修をすることで教科書的な知識だけではない実践的な知識や技術を習得し本当の意味での「医師」として成長してきたのですが、以前と比べるとかなり専門分化してしまった中での研修のために、当直の時以外は小児科の診療や縫合などの小外科の処置等もしたことのない（それも指導医のいない中で）医師が多くなってきております。「自分は外科なので小児科は診られません」などと当然のように言っている医師をみると、地域の医療機関では絶句してしまうしかないのが現状です。

幸いにして私個人は、自治医大卒業のため、地域に出る前の2年間は内科の医局に籍を置かせていただきながら、外科、小児科、麻酔科、産婦人科とローテーションで研修をさせていただきました。今、考えますとやはりその間に診せていただいた症例のお陰で、実践的な知識や技術を得られ、現在内科医として勤務していますが、とりあえずは専門医に紹介すべきかどうかの判断をするのに非常に役立っております。前述のような「自分は内科医なので…」などといった事態は免れております（ただし、他の専門医に診ていただける時は二度手間とならないように最初からそちらにお願いしてしまうことはあります）。

全国の医師数が人口10万人に対し目標数を達成したため、地域の実態や労働基準法からかけ離れた勤務実態の調査もせずに医学部の入学定員数が削減され、今回の制度により、ますます地域の医療現場には厳しい状況が訪れようとしております。

研修医の過労死が認められたことで、今回の制度でも給与や休暇に関する目安が示され、少しずつ労働環境が改善される兆しが見えてきていることはいいことですが、常に「on-call」状態で働いている研修医以外の医師には、ますますしわ寄せが来るのかと思うと何ともいえないところです。

患者さんのニーズが高まる中で、地域でもそれに見合った医療を提供していくのはほとんど不可能な状況で、これがますます悪循環となり、やがては地域での医療は衰退してってしまうのでしょうか？ この制度が定着し、プライマリ・ケアを実践できる医師が増え、それが地域に還元されると信じて筆を置かせてもらいます。



開業への夢 …小児科勤務医の想い

夕張市医師会 西見 寿博
夕張市立総合病院

平成10年4月に夕張市立総合病院に小児科医として赴任して以来、6年目を迎えています。赴任当初、17,000人であった夕張の人口も今では14,000人も切るかというくらいに減り、子供たちも少なくなってきました。ここでは病院外来業務以外にも地域の乳幼児健診や園医・学校医としての仕事があり、今までに経験しなかった小児科診療をさせていただいている実感があります。外来診療と地域の学校保健を併せてみていくことは、地域医療の本質に迫れるのではないかとも思えるからです。着任時に当時の事務局長から、「病院開業医」のようにやって下さいと言われたことが心に残っています。

大学卒業以来、20年間勤務医を続け現在に至っていますが、今でも時々開業に夢を見ることがあります。自分が子供たちにどのように接することができるか、もっと子供たちの心の声を感じられないだろうか、病気の子も元気な子も気軽に入って来れるような診療所は創れないか、働くお母さんが安心して預けて仕事ができる病児保育はできないか、そんなことをとりとめもなく考えていると、開業も面白そうだなと思ってしまいます。実際、開業寸前まで考え設計図を引いたこともありました。

しかし開業に踏み切らず、今まで勤務医にこだわっている一番の理由は、病気の子供たちが元気になって病院をさよならする時に見送るうれしさや充実感、安堵する気持ちをもっと感じていたいと思うからです。開業すると入院させて様子を診てゆくことがなかなか困難であり、おそらく診断はこうだろう、あるいはこういう治療がいいぞと

分かっているでも外来治療を超えるような状態であれば、どうしてもそれ相当の設備とスタッフのそろった病院にお願いすることになります。自分で治るまで様子を診てゆきたい、そして元気になった時に笑顔で送り出してあげたい・・・どうしてもこの気持ちから抜け出せず今日に至っています。病院勤務医だとやはりいろいろな疾患に出会います。同時に様々な家族とも出会います。あまりの忙しさに十分お話も聞けずにご過ごすこともあり、その都度軌道修正してきたつもりですが、なかなか難しいこともありました。また大きな病院にいと、子供一人ひとりとしてよりも、つい何人の子供たちが来ているという、集団としてしまうことに陥りがちで、子供たちが言いたいこと、伝えたいことに十分な時間耳を傾けることも忘れ、ついつい早く早くとせかしてしまう診療になっていたこともありました。そういうことが続くと、勤務医としての自分の限界を感じてもう辞めようかなと思ったりでしたが、そのような後に、また元気に退院する子供たちに出会うと、こちらも元気をもらったように感じ、またがんばるかと思ひ直し今日までできています。

勤務医でありながら開業の先生方が接するように、子供たちの気持ちに少しでも近づけるような診療ができないか、もう無理かなと思いつつ、開業への淡い夢を抱きながら、定年まで残された時間を勤務医として勤め果たしたいと思っています。



美唄と啄木

美唄市医師会
しろした病院 吉村 誠治

「石狩の美國といへる停車場の柵に乾してありし赤き布片かな」

「一握の砂」の中の題341首目にこの歌が出てくる。明治41年夏以後の作、1千余首の中から551首を抜き、「一握の砂」として収め、宮崎大四郎、金田一京助の両君に捧ぐとも書かれている。

この歌に出てくる「石狩の美國」とは、石狩地方にはない駅名である。さらに明治41年1月19日朝、吹雪の中の小樽駅を発ち、翌20日午前10時30分岩見沢駅発2番の旭川行きに乗り、美唄駅を通過している。傷心の啄木が小樽に妻子を残して、最果ての釧路に向かう汽車の旅で、たまたま停車した田舎駅の一隅に、ぶら下がっていた赤い布片（当時保温のために使用したツマゴという藁靴の中に巻く赤いゲット）を真っ白い雪の降る中で、車窓から見た啄木が歌心を誘われたのだろうか。その2年後に出された「一握の砂」に出てくるので、美國は美唄の記憶違いと思われる。

この度、美唄ロータリークラブ創立30周年記念事業の一環として、啄木の歌碑を建立することになった。

昨年10月5日、美唄駅開業百年を記念して新築された美唄駅に、美唄ロータリークラブの会員である広岡文太郎氏が、この歌を縦126cm、横56cmのシナの合板に、啄木の直筆の資料から一字ずつを探して模写、拡大し彫り込んだ歌碑を贈られた。当日は関係者が集い、吟詠もあり、この歌碑の除幕式が行われた。

この贈られた歌碑の文字をとって、美唄駅の東口に、美唄ロータリークラブが石の歌碑を建立し、美唄市に寄贈して永久に保存されることを願

ったのである。

現在、道内に啄木の歌碑が、函館に5基、小樽に2基、札幌に3基、釧路に18基、その他、北村、倶知安、滝川、阿寒にそれぞれ1基ずつ、32基が建立されているといわれる。

啄木が明治40年5月から来道し、函館での120日余の代用教員、そして9月には、札幌での2週間の北門新報、すぐ小樽日報に移っている。翌明治41年1月には、釧路新聞行きを勧められ赴任し、同年4月2日には、わずか3カ月で釧路を去っている。

思えば明治40年5月から翌41年4月までの、わずか1年にも満たない在道の間、32基もの歌碑が建立される強烈な足跡を残した。

薄幸の詩人への思いはつきないものがある。

先に、林芙美子が昭和17年8月15日、美唄を訪れた折りの印象を詩集「面影」に発表している。「美唄の町はうつくしきうたとかくなり……」この自筆の詩碑が、市役所前の中央公園にある。

今、美唄にまた一つ文学の碑ができたことを喜びとしている。



“起立性調節障害児が 増えてゐる？”

北海道大学医師会
小児科 小林 邦彦

春から初夏にかけて、小児科の外来に訪れる小中学生の中に、いわゆるO.D. (起立性調節障害) と診断される児童が多くなって来る。朝起きが悪い、午前中は調子が悪く、学校では頭痛とか腹痛が痛いとか、目眩がするとかで、保健室の常連になる子どもたちである。本来この病態は、外気温が上がり、末梢血管が拡張してくる春から夏にかけて多く発症するのであるが、最近は季節を問わずその数も増えているような気がする。住居環境が格段と良くなったため、寒暖の差が少なくいつも快適な温度に晒されているためだろうか。昔の一般家庭では、夏以外の朝晩は結構寒く、特に冬の学校は寒かった。また、最近の子どもは屋内での生活時間が長く、あまり外での行動をしらない。従って、温度差による刺激が少ない。顔を洗うのも、温湯をどこの家庭でも使う。冷たい水や冷気による血管運動神経の刺激効果もほとんど受けない。こんなことが、O.D. の増加に絡んでいるのかも知れない。

ところで、最近、「友だち親子」という言葉があるそうだ。昔でいう親子関係とは違う感覚でつき合う家族のことである。互いに名前で呼び合う親子もあるという。親に怒られたことがないと言う子どもに出会うことも多くなった。これは異常な現象である。子どもは、教えなければ何をしでかさか分からない動物である。放っておけばすぐ問題を起こす。このような場合、「悪いことは悪い」、「我慢をなさい」、「人に迷惑をかけるな」、「規律を守る」などと言った基本的なことで親は当然叱るはずだが、そうではない親が増えているようだ。子どもが何か問題をおこした時、たまた

ま他人がそれを叱ると、子供に対して「あのおじさんは怖いね。叱られてかわいそう」などと言ったりする親もいる。要するに、「物分かりの良い親」、「優しい親」を演じて、善悪などを責任持って教えるべき役割を放棄している親である。そのような基本的なマナーはどこで教え込まれるのだろうか。学校か？学校では遅すぎる。そもそも学校の先生も、最近では「友だち先生」が多くなり、「怖い先生」はほとんどいなくなっている。先生が子どもを叱ると、たちどころに親から学校にクレームがくるから、先生でも叱れなくなっている。最近の「切れやすい子ども」の増加には、叱られることに慣れていないことも一因と言われる。O.D. の話から少しずれたようだが、実はこの「叱られる」ということは、子どもにとって緊張感・興奮を与えるという意味で重要な血管運動神経の刺激にもなりうる。O.D. の子どもは、朝起きが苦手であり、いつまでも布団にくるまって起きて来ない。親も、布団をはがしてたたき起こすということもほとんどしない。一方、夜はいつまでも起きていて、朝とは同じ子どもかと思うほど元気なのが特徴だ。元気のなら、散歩やジョギングでもすればいいのだが、大体は親と一緒に「団らん」と称してごろごろしている。従って、脂肪はつくが、筋肉はつかない。O.D. の治療の一つに、下半身の筋肉をつけて、下半身の血管拡張を防ぐという方法があるので、大いに運動をして欲しいのだが、不定愁訴が多いばかりでなかなかままならない。

O.D. は、昔の貧しい時代には庶民の病気ではなく、金持ち・貴族の子弟のものであった。テレビの「おしん」で、米問屋のむすめがO.D. の症状を持っていたのに気がついた方があるかも知れない。庶民は朝早くから、否応なしに働くため、O.D. など出る暇もなかったのであろう。

天国と地上の間

深川 医師会 成田 昭彦
成田 医院

背中に加速度が増すのを感じながら滑走路を走って行く。と、足の裏に地上から離れた感触。ジャンボジェットは離陸、信じられない急角度で上昇し、やがて空にすい込まれて行く。こんな大きくて重い物が空に浮くなんて！

今年にはライト兄弟が初めて空を飛んで丁度100年。飛行機好きには記念の年になる。兄弟はオハイオ州デイトンで自転車店を開業し、同時に2階で地方新聞を印刷発行していた。そこでドイツの飛行機研究者リリエントールが自作のグライダー（コウノトリをモデルに、羽ばたき飛行を考えていた）で墜死の記事を読む。兄弟はその記事に触発され飛行機の研究を始める。成功でなくて失敗して死んだ記事を見て始めたというのがすごいところ。1896年のことである。

まず複葉の帆の実験を開始。横安定性と操縦のため彼らのオリジナルである“たわみ翼”を考案。この装置は後にパテントの問題でエルロン（補助翼）が発明されてからも、ライト社の飛行機ではこだわり続ける。縦安定性のため水平安定板を前部に、垂直安定板（垂直尾翼）を後部に設置。これも彼らのオリジナル、それまでの実験飛行機に垂直尾翼はない。モデルとしていたどんな“鳥”にも垂直尾翼はないもの。兄弟は気象庁に問い合わせ定常的に風の吹く場所を探し、ノースカロライナ州キティホークでグライダー実験を始めた。既存の資料を基に実験を繰り返していたが、期待する性能が得られない。一時はあきらめかけたが、くじけずがんばれたのは兄弟の強み。先人のデータがデータラメなのではと悟り、故郷デイトンに帰って独自に風洞実験を始め、それまで

の飛行に関する理論を覆していった。今では飛行機や自動車の設計に欠かせないこの風洞装置を初めて作ったのもライト兄弟。合わせて飛行機用のエンジンも自作してしまう（水冷4気筒3,296cc12馬力、自動車メーカーに依頼したが取り合ってくれなかった）。

1903年（明治36年）12月17日初飛行の日を迎える。キティホーク通いを始めて4年目の暮であった。クリスマスはデイトンの家で迎えたかったのは是非ともこの日成功させたかった。朝から絶好の向い風、飛行機の名前はそのまま“フライヤー”。兄弟は交互にテストパイロットしていて弟のオービルが操縦する番だった。兄ウィルバーが翼端の支柱を支え、エンジン全開、フライヤーはレールの上を滑りだし、やがてウィルバーの手を離れ空中に浮いた。飛行時間わずか12秒飛行距離36.6m、人類最初の動力飛行の瞬間である。歴史の証人たる目撃者はたったの5人、三脚に設置したカメラがその瞬間を捉えた。数十センチ浮いたフライヤーとその際に見送るウィルバーが撮っている。フライヤーの現物はアポロ11号宇宙船等と共にワシントンの国立航空宇宙博物館（スミソニアン博物館）に展示されている。

ライト兄弟は特許を飛行前の1903年3月に出願している。発明の名称：飛行機械Flying Machine（Air planeという言葉はまだない）。発明の属す分野：重力または動力を利用して、翼が角度を付けて空中を動くことにより生じる反力によってその重量を支えることのできる飛行機械。飛行機の概念の特許にしたためその後開発された飛行機が高い特許料を払わされることになる。



緑 陰 随 想

“空を飛びたい” 大空を自由に飛ぶ鳥を見上げて人はいつも思っていた。本当に飛べるようになると、やがて地上から見上げるのとは違う世界があるのを知った。そこは、天国と地上の間。

“100年を迎えるにあたって”

小樽市医師会 大口 正樹
明治眼科医院

当院は明治37年に創立しましたので、来年で100年を迎えることとなります。100年の記念に何かないかと考えておりましたところ、小樽駅から運河へ通ずる中央通りに面した隣接地を手に入れることができました。偶然にもこの隣接地は当院の発祥の地で、初代院長の溝淵重氏が開院した所であります。

この土地の活用にはいろいろ悩みました。賃貸ビル、診療所の拡張、駐車場等々。当院の近辺にはまとまった緑地がないので、思い切って、森を作ることに決めました。ナラ、ヤマザクラ、ヤマモミジ、イタヤカエデ、ツリバナ等を植え、下草にはコグマザサ、コゴミ、フッキソウ、ヘメロカリス等を配置しました。“自然の森”のイメージで作りましたので、冬囲いなどの管理をしなくてもすむように、造園屋に考えてもらいました。これ

からは草木の成長や四季折々の変化が楽しみになりました。患者さんにも好評です。できてから1カ月しか経っておりませんが、少しずつ土地になじんできており、花を咲かせている木もあります。鳥も見かけるようになり、さえずりが聞かれます。

さらに、この森の存在や当院のことを一般の方知ってもらうためにホームページを作成しました。専門の業者と相談しながら作ったのですが、業者は患者側の立場で医療機関をみるので、話し合いの中で、いろいろと気付かされることがありました。

URLはhttp://www.firstpass.net/meijieye_hosp/index.htmです。興味のおありの方はアクセスして下さい。



医院外観

緑 陰 随 想

一私の庭の花暦一

渡島医師会 西谷 雅行
西谷内科小児科医院

真夏日が続き、蟬時雨で明け昏れるこの頃です。国道5号線を行楽に出掛ける車も混ざり行列を作り信号待ちしており、汗を拭き横目で眺め庭の草取りをしています。猫の額より少し広い我が家の庭ですが、ここは季節を告げる樹木と草花にそれぞれの思い出を詰めた私の宝石箱なのです。

何十年來、計画性は全然なく空いてる場所に草花、山草と植え込み雑然としてますが、観葉植物、山草、樹木の鉢植え、プランターの草花と合わせますと、夥しい数量になります。開業して30年を越し医院も私同様骨董品ですが、開院以来、医院玄関と診療室に季節の花を飾ってますが好評で、花を楽しみにしてる老人の方々、また、古い患者から花の差し入れもあります。草花を絶やしたことはなく、夏は水温の上るのが早く、長持ちさせるのに水の取り替えが大変です。

顧みますと、昨年木枯しの吹く初冬に家の中に入れました鉢物も1月には椿、サザンカと花をつけ、カラーも春先まで花を咲かせ、2月にはシンビジウムが目を楽しませてくれました。切花にしても豪華で長持ちします。3月には、甘い香りのジンチョウゲ、たくさん花をつけるアザレア、また、ひっそりと可憐な花の春ランの咲く頃、外は残雪もあり春未だしですが、中旬になると陽当たりの良い雪解けの樹木の根元より黄色の福寿草が咲き出し、次いで色とりどりのクロッカスが庭の各所に見られ活気づいてきます。4月中旬から北国の早春を彩る山草の芽が膨らみ、相前後して清楚な花をつけます。水色のエゾエンゴサク、白色のエンレイ草、サンカヨウ、ピンクのカタクリ、ノビネチドリ、ハクサンチドリ、フジ色のシラネ

アオイ等々です。これらの山草は、溪流釣りの際、春の川辺や溪谷で採取して庭に植えたもので、毎年花びらを見ますと道南の河川が浮かんできます。

最近「フラワーソーン」という聞き慣れない言語がありますが、野鳥の一斉調査「バードソーン」からの造語で、野山を廻り花の開花時期、分布等のデータを集め、未来への貴重な資料にするとのことです。私も「フラワーソーン」ではありませんが、前記山草の開花状態を参考にして4～5日間の天候、仁山高原の残雪の程度を眺めどこの河川にするか？溪流釣りのメルクマールにしております。

桜前線の聞かれる4月下旬より5月上旬には、庭の樹木、草花も堰を切ったように咲き出します。梅、辛夷、木蓮、桃、連翹、雪柳、八重桜等、ピンク、紫、白黄色の一団が短期間ですが中空で春を謳歌して過ぎてゆきます。一方、地上では十数種の水仙と二百球以上の各種色彩のチューリップ、甘酸っぱい香りのヒヤシンスが春のメロディを奏でます。八重桜の花吹雪が庭をピンクの花びらで覆う頃、水色のリラの花も枯れ、各色あるツツジとドウダンツツジが見頃となります。華麗な色彩の大輪のボタン、シャクヤク、シャクナゲと咲き終わり、フジが咲くと初夏を感じ、樹木は梅花ウツギの白い花が終わると一服です。草花は切花にしても豪華絢爛なジャアマンアイリス、アヤメも終わり数種のオダマキ、クレマチス、大輪のケシも枯れ、ユリが強烈な香りと共に種々の色で競って咲いています。ラベンダーの紫色とピンクと白色のコスモスがそよ風に揺れています。雨のよく似合う紫陽花も盛りを過ぎ、青と白の桔梗が咲き、夏水仙とピンクのリアトリスが切り花として飾られると夏も酣です。一休みしてた樹木のネムが暑さの中、涼しげな淡紅色の花をつけ、ムクゲが枝一杯に花を咲かせると秋間近です。鉢物では、大輪のハイビスカス、ジャスミン、ブーゲンビリア、ゲンペイカズラ等が容姿と香りを堪能させてくれます。秋桜も背丈と花数を増し、カンナはダイナミックな花を霜の降るまで楽しませて

緑 陰 随 想

くれます。十数種類の菊が咲き乱れ赤いサルビアと共に、初冬、雪の降るまで咲き続けます。ドウダンツツジ、モミジの紅葉が終わって、凧が枯れ葉を舞わせ始めると、庭の1年に終止符が打たれ、冬將軍の到来を気にしつつ、小春日和の1日、冬囲いの必要な樹木草花の鉢類、来年植える球根類を家に入れますが、その中に12月下旬までを考えてポインセチアの葉の色づき状態、クリスマスカクタスのロマンチックな名前と花の色彩が1年の苦勞を締め括ってくれ、来季に期待しつつ我が家の花暦が終わります。

藤沢周平の世界

釧路国医師会 行木 絃一
弟子屈クリニック

「緑陰」という言葉に惹かれて投稿させていた

だけ。冬が長かったせいか、春らしくなって以降の季節変化には瞬目を厭うほどに目を奪われてきた。今や「緑の爆発」とでも形容したい辺り一面である。

近年、何があってもおかしくないと思われ続けてきた世情・世界の流れに、イラク戦争以来一段と不可解さが加わって頭の中は混乱の極致にある。逃げるわけではないが、緑陰に本をひろげた。

藤沢周平の諸作を実は最近まで手にしたことはなかった。「時代もの」というジャンルが縁遠かったこともあるし、他に読むべきと思われる本が山をなしていることもあったと思う。

契機は藤沢周平と郷里を同じくする友人である。学校の後輩でもある彼は、縁あってこの数カ月をともに過ごしている。彼にとっては一種の退避であり、落魄の気分濃厚な事情が北の地に彼を運んだのだった。人生途上に宿病を背負い込んで教員を辞め、業界新聞記者に退避生活を余儀なく

された周平の軌跡と、奇しくも重なった故かどうか、彼は熱心な周平愛読者であった。勧められるままに文庫本を手にした私は、いつしか藤沢周平の世界に深く沈潜していた。

私は見ていないが、最近『たそがれ清兵衛』が映画化され、山田洋次の優れた監督下に周平の世界も余すところなく伝えて好評を博したようだ。というのは無論山田監督の世界をも十分に伝えていたと思うからだ。見てはいないが、「それ」なのである。そして「それ」以上にどうか以外に、多彩にして奥行き深い諸作品が列をなしている。緑陰に「退避」しながら、私はついに全作品を讀了した。今、手元に『半生の記』をめくりながら、余韻とも感慨ともつかぬ「宴のあと」を辿っている。

次々に作品に触れていきながら、ある感覚に囚われていることに気づき、それがいや増すのを抑えようもなかった。詰めていえば「出会いと別れ」なのだ。作品世界に没頭しながら一行一句の出会いを体験しつつ、読めば過ぎ去る別れの情が沸々と湧きあがる。さながら人生ではないか。周平世界の、これが魅力なのだろう。魅力・・・？。

今見れば、この時代は限りない混迷の内であり、明日をも知れない。藤沢周平が好んで作品の舞台にした庄内の城下町や江戸の下町の「日常」も、あるいは今のよういつ消えるとも知れぬ霧の中に明け暮れたのだったろうか。

百年の後、もう一人の周平の作品を待ちたい。



緑 陰 随 想

「旅一長浜」

滝川市医師会 武内 恵輔
滝川市保健センター

新型コロナウイルスに感染していた台湾の医師が同じ日に関西空港に着いたことを後になって知った。当日、空港も京都までのJRも閑散としていた。昼過ぎ「長浜」に着き、雨上がりの町を駅から遠くない黒壁スクエア方面へ、昔懐かしさの漂う石畳の町並みが美しい。小樽を真似たか、ガラス製品の店が観光客を呼んでいる。昼飯を茂美志や名物の「のっぺいうどん」、大きな壺のような器に、大きな椎茸、油揚げ、かまぼこ、たれはくずのあんかけ、生姜の味がして美味しい。店を出て曳山会館へ、4月に行われる長浜祭りについてレクチャーしてくれる。子供歌舞伎狂言が催される山車は大きく漆塗りの豪華なものだ。高山祭りの山車に比べると細工が大まかだが重量感がある。修理コーナーがあり年一台ずつ改修する、3,000万円かかるという。十数年で1クール。狂言に参加する子供は男の子だけ、1ヵ月の稽古に歌舞伎の専門家が来る。秀吉が始めた祭り。長浜は北国街道の起点。琵琶湖があって交通の要衝として賑わった。ちりめん、ビロードの産地、TVコマースルにみる浜仏壇もある。これは装飾があっさりしているが値段はけっこうなものだ。

大通寺に向かう石畳の表参道は、アーケードをとりはずし軒を深くして店を客に身近にする工夫をしたという。生活のにおいのする落ち着いた町屋風の店が並ぶ。数珠や扇子、さんぼう、それに道具類、金物、衣料品、ガラス製品、駄菓子など見るだけでも楽しい。途中で堀川が流れ石垣のつつじの花がきれい。橋の欄干は長く伸びた狐の胴、お花さんきつねだ。ボタンを押すとお話をしてくれる仕掛けがある。長浜城に住んでいたお花

さんはいろいろ人助けをして町の人に親しまれたという。二層の山門を持つ大通寺は大きな伽藍で本願寺の別院だった。桃山時代の遺構や立派な襖絵が見られる。しかし、今はさびれて床も柱もかなり傷んでいてこのままではつぶれてしまいそうだ。豊かに見える長浜も、このお寺の維持管理までは力が及ばないようだ。昔の住職の残した書蹟を並べたコーナーに昆虫のスケッチ画帳があり、これが大手門通の街灯を飾っているモニュメントの原画らしい。

長浜祭りが行われる長浜八幡宮、一角に高良神社（石清水八幡にも高良社があった）。祭神は同姓の武内宿禰、長命と呆け封じを約束してくれるので賽銭をあげた。魯山人ゆかりの旧家安藤家を見学、彼が彫った木彫りの看板が目を引く。宿は城跡公園の中に建つ国民宿舎、一泊二食7,000円、ハイキングスタイルの女性のグループがかしましい。公園では明日から始まるツウディマーチの準備をしていた。

遊覧船で約30分竹生島、定置網を避けながら、のどかな湖水を行く。水がきれい。森の緑の中の神社とお寺のコントラストは美しく、竜宮城のようだ。観音堂で白装束のお遍路が口々にお経を唱えていた。1時間の滞在時間で同じ船で長浜に戻る。港に着いた彼らは思い思いにマイカーに乗って散って行く、あっけらからんとして四国のお遍路さんと気分が少し違う。しかし、観音さんもお大師さんも長年の間、衆生の心のカウンセラーを務めている。周りのやわらかな自然も味方しているようだ。

姉川古戦場からみた伊吹山は、採石のため大きくえぐられて優美な形が崩れている。お市の方がこれを見たらびっくりするだろうなど思いながら、観音の里を訪ねる旅をつづけた。



緑 陰 随 想

ベランダ園芸

北見医師会 千葉 勉夫
千葉循環呼吸クリニック

自宅は、医院の3階にあり居間に面してやや広めのベランダを設け、ここで鉢物を台上に並べ、もみじなども配することで庭の雰囲気を出しております。6～7月は、日は長くなり暖かくなって、診療後の一時を鉢物の世話と鑑賞にひたれる1年で最も良い季節です。

鉢物の一部は高山植物と山野草ですが、もう大分以前に縁日で少しづつ手に入れたもので、少なくとも20年以上経ったものです。

可憐な花が風にゆれるコマクサ、小低木に大きな紅花をつけるエゾツツジは目立った存在です。

高山物というと高温多湿を嫌い育てても気難しいというイメージがあります。確かに長年育てても多くは機嫌が悪く、何とか細々と生き長らえつつ、中にはいつの間にか消えてしまうものもありました。やはり山のものは山が一番。

10年前山野草の専門家（この方は高山物はやらない）に培養土の調合を伝授され、また2～3年に1回の植え替えを励行するようにすすめられました。最近おろそかにしていたことです。それまでの土は、火山灰は使っていましたが水はけの悪い代物であったと思います。

伝授された培養土で植え替えを行うことで、多くの植物は活力を取り戻しました。しかし、中には逆に遠慮なく即座に枯れていったものもありました。これが癪です。以前はいいかげんな土で持ちこたえていたものがどうしたのか。

いろいろ考え合わせ、また図鑑等で性質や実生地の様子などを調べた結果、高山物といってもこれまでのイメージと違い、どうやら水湿を相当好むものもあるのだとの考えに至りました。

そこで、これら新培養土で枯れた植物への対策として、水ゴケや鉢皿を使って湿潤を保つ方法をいくつか試してみたところ、チングルマ、イワカガミ、エゾツガザクラ、イワギキョウなどが正に活き活きと爆発的に生育しました。改良の余地がありますが、発想の転換で一步前進です。これまで、どうしても足掛け3年を持たせられなかった黄色のスズランに似た花をつけるはずのアオノツガザクラも、多分こうした方法で今度は育ってくれるであろうと期待しています。

花後につける種子は、完熟して風に飛ばされる前にしっかりと採り播きにすることで数年後の株の更新を確保できそうなこと、さし木にすると簡単に根付くものがあることなどを遅まきながら知りました。秋の紅葉が見事なウラシマツツジは古い解説書には難物とも書かれていますが、地下茎をはりめぐらせ繁殖は旺盛です。

このように多くの植物が今順調な中で、エゾイソツツジだけは相変わらず鳴かず飛ばずの状態、種をまいても芽だしせず未知の植物として残っています。一方でイワヒゲ、チョウノスケソウ、イワツツジなどは鉢が増えて持て余し気味で、園芸店で引き取ってくれないかと思案中です。

その昔、先輩から戴いた実生のキバナシャクナゲの小苗4本は、もう30年物になって小ぶりながら太い根を張っております。

ツツジ科などの高山物の花期が終わると次は山野草が続きます。

ともあれ、鉢の水やりを済ませ、まだ夕日の残るベランダで、ビールを飲み枝豆をつまみながらのわが庭の観賞と思索、ときにカミさんとの語り（世間話し）は、最近きびしくなる一方の医院経営の労を一時忘れさせ、リラックスできる貴重な時間と空間です。

緑 陰 随 想

車と

旭川医科大学医師会
第二外科

葛西 眞一

このところ旭川の夏は湿度も高く蒸し暑い。こんな時は、天然クーラーでのドライブが快適。交通量の少ない高速道路、エンジンと風切り音だけの世界は心地良く透明である。

熊しか通らない北海道の高速道路と評判宜しくないが、そう言えば開通したばかりの名神高速は狸さえ歩いていなかった。昭和37年に大学に入学してすぐ自動車部に入った。昭和30年初期の観音開きドアがなくなったクラウンで練習した。半年後に真駒内の運転免許場で試験を受け、ラッキーにも一度でパスした。

昭和38年に初めての車、パブリカ700ml空冷二気筒を手に入れた。小型軽量で車体の割に幅広のタイヤは安定走行性抜群で、幹線道路とはいえ狭いジャリ道をパブリカは良く走った。

二番目は水冷四気筒カローラ1000。この車で、昭和41年2月下旬から約40日かけて全国一周に出かけた。函館・大間のフェリーは小さくひどく揺れた。青森から4号線を一気に下り3日目の夕方都内へ。現在の首都高速のどれかと思うが、分岐点で立ち往生したり、間違っ進入し、そのままバックで戻ったり（それほどすいていたのだ）。1号線をさらに南下し名古屋城付近から名神高速に入る。こんな物作ってどうするんだ。終点四日市（と思う）を出るまで、見たのはハイウェイパトロールのマツダコスモ他数台。とても今日状況を想像できなかった。

昭和50年に米国オハイオ州クリーブランドへ留学する機会を得た。広い北米大陸を縦横に走る高速道路網には驚いた。オイルショック後の不景気のためか、高速道路にはバンパーやマフラーが転

がり、車体の破損箇所をテープで修繕した車や閉まらないドアにロープを巻いた車が走る。フォードの大衆車グラナダ4000mlを譲り受けてカナダ辺りまでドライブした。北海道では数時間走ると海に出るが数日走っても海へ出ない。良く整った設備とシステムが車社会を支えていた。30年の遅れをバブルの時に取り戻せたなら…。

この頃から時々欧州の学会に出かけるようになった。欧州の高速道路事情も良いが、米国に比し混雑している。なるほどアメ車はアメリカ大陸に、欧州車はヨーロッパ大陸に似合う。レンタカーは丈夫なベンツが良い。平成3年11月、東西ドイツの国境が開いた。たまたまこの2年前と半年後にベルリンを訪れる機会があった。統一前の国境検問所は不気味な混雑の中、再び出国できるかと大いに不安であった。東側の空は大気汚染で暗く黒ずむ。車体がプラスチック製と言われる有名な東側の車トラバントが黒煙をあげて走る。経済の遅れは相当なものだ。東ドイツの真っ只中にあるベルリン。そのベルリンを東西に分断する厚い石の壁。大戦後40数年、とうとうこの壁が崩壊した。国境検問所には東側の戦車も兵隊も見当たらず、ブランデンブルグ門も自由に出入りできる。東ドイツの誇るテレビ塔に登った。広場では何と早くも日本車ショーが開催されていた。ペルガモン博物館を訪れる。偶然真っ白いアメ車のキッチンジャー米國務長官一向に遭遇した。素早く通行人を装いワンショット。身震いするような歴史の早い流れを感じた。

間もなく58回目の終戦記念日だ。いつまでのこの快適な北海道のドライブを楽しめるだろうか。



緑 陰 随 想

マスターズ トーナメントの思い出

宗谷医師会 高橋 昭彦
たかはし内科胃腸科

春の花が咲き揃う4月上旬、アメリカ南部ジョージア州にある小さな町オーガスタは世界の注目を集める。タイガーウッズらスーパースターが集まるオーガスタナショナルでのゴルフの祭典マスターズトーナメントである。1999年ホームコースであった桂ゴルフ倶楽部の理事長杯に優勝し念願のシングル入りを果たした私は、自分へのご褒美と開業10周年という節目。また、その日が私の誕生日であるという幾つかの理由をつけ、1週間診療を休み憧れの2000年マスターズトーナメント観戦に出かけた。成田を出発し13時間かけてアトランタで乗り換え後、オーガスタに着いたのは金曜日の午後10時頃でマスターズトーナメント3日目、4日目の決勝ラウンドの観戦となった。翌日テレビで流れるマスターズの歌が頭の中で駆け巡り、期待と興奮で胸を高鳴らせて訪れた、ゴルファー憧れのオーガスタナショナルはテレビで見ると同様の美しさと存在感、テレビでは想像できないアップダウンのあるコースであった。フェアウェイは微妙なアンジュレーションがあり、トーナメント3日目なのにディボット1つ認めず(後日分かったことであるがショット直後は縁の砂で目土し、その日のうちに芝に張り替え、翌日にはまったくディボットがなくなる。)完全にセパレートされた林間コースである。テレビではグリーンの速さはある程度想像できるが、グリーンへの傾斜もはるかにきつい。池の16番ショートホールでカップに背を向け、パットする光景を何度も目にした。

3日目の正午頃甲高いサイレンと共にプレーが中断した。空を見上げて雨もないのにどうしてと思った20分後突然の雷雨である。正確な天候で

ータと共にトーナメントが進行していた。30分後雨は止み天候が回復したがプレーが始まらない。ショップでマスターズグッズを買い時間を潰していると多数のボランティアがコース横一列になり、コース内の清掃後プレーが再開した。プレーを開始するのに同一条件でなければということだろう。多数のボランティアにトーナメントが支えられていることに驚き、結局2時間半の途中中断後その日は日没サスペンデットとなった。フェアウェイを歩く選手はテレビでお馴染みの顔でどの選手も輝いていた。お目当ては大会2連覇を狙うタイガーで顔が小さく、体が引き締まっていてオーラが出ていた。

マスターズまで来てと思いながら、日本の選手について廻り応援してしまう。ジャンボと同組の無名な小柄なレフティのショットが目をついたが、今年のマスターズチャンピオンとなったマイクウイアーだった。パトロンと呼ばれるギャラリーは世界中から集まり、100ドル程度のチケット代が当日には何十倍にも跳ね上がる。最終日はあちこちのホールで拍手と歓声上がり、選手がグリーンに上がって来る時はスタンディングオベーションで拍手で迎える。鳥肌がたつ瞬間である。こんなゴルファー誰もが一度はプレーしたいと憧れるオーガスタナショナルは完全なメンバーシップコースで、5月~11月はクローズだそう。数少ないメンバーに知人でもいなければプレーは困難であろう。プレーしたらスコアは幾つだろうか、パットはどうだろうかと思いつつ、今でもコースのレイアウトはしっかり頭の中にあり、それ以後のマスターズトーナメントをテレビで観戦し楽しんでいる。でももう一度あの感動を生で味わいたいと考えている。



緑 陰 随 想

豊かな老後 確かな支え… 現在、普及推進運動を実施中です！

日本医師会 年金

ご加入のおすすめ

特 色

1. 日本医師会が運営する会員のための唯一の年金。
私的年金として我が国最大規模を誇っています。
2. 長寿社会に対応した年金です。
長生きするほどお得な年金です。
3. 生活設計に応じて年金額を決定できます。
4. 掛金には上限がありません。増減はいつでもできます。
5. 計算利率は魅力ある1.5%です。

加 入 の 要 件

64歳6ヶ月未満の日本医師会会員（会員種別は問いません）

* お問い合わせは

北海道医師会「会員課」 TEL011-231-1434
FAX011-210-4514